

# ああ、相談業務

～ 玲愛さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

25

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

発達の問題を抱えながら、学校不適応が長く続く中で、自己評価を下げ、思春期に入って自傷行為や自殺企図を繰り返す子どもたちがいる。今回はおよそ10年付き合った、そんな子の話をしようと思う。

## 家族

玲愛さんの家族は、会社員の父親（43歳）、専業主婦の母親（40歳）、兄（13歳）の四人で、閑静な住宅街にあるまだ新しい一戸建てで暮らしていた。祖父母は父方、母方とも遠方に住んでいて交流は少ない。

## 相談経過

玲愛（以下本児）さんと最初に逢ったのは、小学校2年生の時に、たまたま筆者がスクールカウンセラー（以下SC）として勤めていた学校でのことであった。学校側から困っている子の相談として玲愛さんの名前があがった。他にも何人が相談にあがっていて、本児とというより、母親との面談が設定され、玲愛さんについても本児の教室での様子を見たり、普段の様子を担当から聞いた後、母親との面談となった。

担任からの話は以下の通り。教室では落ち着きなく、教室から飛び出すこともしばしばで、担任としては扱いに困っている。余りにも落ち着きがない時は支援員さんが別室で対応している。1対1だとそこそこ落ち着いて、紙細工に没頭する。紙さえあれば、様々なものを作って遊んでいる。勉強は普通で、特に能力が低いわけではなさそう。ただ集中が続かないのでテストも途中で終わってしまったりするとのこと。

まあ、ここまで聴くとADHD（注意欠陥・多動症）が疑われる。児童精神科なり児童相談所なり、発達検査を勧めたことは無いのかと聞くと、担任からそれは言いにくいのでSCから言ってくれないかというのが担任の希望だとわかった。

こういうことは度々ある。担任や学校側は保護者との関係を壊さない為、検査を受けてほしいと中々言いづらく、SCに保護者を説得してほしいとか、保護者に説明してほしいと依頼してくる。SCだって、1、2度あっただけの保護者に状況を説明し、児童精神科や児童相談所に行けといきなり言うのは覚悟がいる。学校側にしてみれば、SCはたまにしか来ないし、学校外の人間だから頼みやすいのだろう。保護者との関係が壊れても支障はないと思っているのかもしれない。そう思うこともあったし、余りその様な態度で頼まれる

のは嬉しくない。しかし頼まれたら仕方がない。何とか保護者と話をしていくしかないのである。

まずは情報をとって、担任に母親の様子を聞いてみた。

母親は呼べばすぐ来てくれるが、本児の様子を伝えると、「ご迷惑をおかけしてすみません」とは言うものの、母親の方から受診の話が出ることは無く、「言っても聞かないんですよ、フフフ。」と笑って終わってしまう。担任の言葉を借りれば「暖簾に腕押し」で担任の大変さを理解してもらえないとのこと。

担任の話を聴きながらどのような母親なのか、あれこれ想像してみた。母親の中には、知的な問題があって担任の話が理解できない人もいるし、話は分かるけどどうしようもないと諦めている人もいるし、まだ小学生なんだから落ち着きがなくても普通だろうと思っている人もいるし、発達の問題だと思いつつも認めたくなくて、つまり自分の子が障がい児だったらという不安から、担任の話を聴き流そうとする人もいる。この母親はどのタイプだろう？何となく二番目の諦めタイプかなと想像した。一回想像してみて、実際に会ってみると想像通りということもあれば、全く違ったということもある。このずれも一つの情報である。従って会う前に想像してみることは大切である。

北海道では運動会が6月初めころに開催されるが、ちょうどその半月前くらいの5月のある日、母親との面談が実施された。この頃になると小学校では運動会の練習が入り、学校全体が落ち着きのない状態になる。時間割が急に変更になったり、天気によって予定が変わったり、狭い教室ではなく広い校庭での活動という中で、更に落ち着かなくなる子が出てくる。ただでさえそういう状況なのだから、本児も当然落ち着かなくなっていることと思ってその日学校に行ったところ、案の定本児は落ち着かなくて、支援の先生が一人ついている様子が見られた。

午前中10時からの面談に、母親は時間通りに来室された。すらっとした体形で、日本的な美人といえる容姿で、服装は上下クリーム色のジャー

ジである。(本州では学校での面談にジャージで来る人は少ないかもしれないが、北海道では結構多い。)少し緊張した面持ちで入室されたが、しばらく雑談をしているうちに、表情は和らいだ。つまり、そこまで人関係が苦手なタイプではないということがこの時点でわかった。

1回目の面談では、母親には家での本児の様子や家族のことなどを聴くことにしている。母親が家で本児の対応に困っているとの話が出れば、それをきっかけに、本児の状態を確認するために発達検査を受けるかという話に持っていきやすいのだ。

実際母親からは、家族のことがあれこれ話され、どのメンバーに対しても困りごとがあるということだった。順番に聞いていくと、父親はいびきが酷くて一緒に寝るのが辛いということ、服も脱いだら脱ぎっぱなし、靴下があっちに一つこっちに一つと散らばる事、兄については趣味のプラモデルが部屋中におかれていて、またその箱やら何やらが床を埋め尽くし、足の踏み場もないこと、本児の部屋も物が床いっぱい散らかっていてこちらも足の踏み場が無いこと、母親としてはきちんとしてほしいのに思うようにならない、一日も早く家を出たいとのことだった。大抵の人はこういう話の時には、涙をみせるのだが、この母親はむしろ微笑を浮かべながら話していた。

困りごとを聴くことができたので、母親の大変さを労いながら、父親、兄、本児の三人がとても似ていること、それもどちらかという片付けが出来ないタイプなのかという話をしていた。母親は「そうなんです。もういくら言っても変わらないし、部屋がそんな状態だから、物が見つからなくなって、何度も買う羽目になったりするし・・・。」とげんりするような話になるのだが、相変わらず微笑。結局この母親は、諦めているタイプという想像が当たっていた。

諦めてしまうと、変化の起こしようがなくなる。何とかしたいと思ってくれていければ、そこに小さな変化を起こす何かを考えていけばよいが、諦められてしまうとそれが難しい。そこで、母親をた

くさん褒めた上で、やはりここは本児の発達検査の話を出した方が良くと考え、「玲愛さんが今どのような状態で、どういうところが得意で、どう伸ばしていけばよいか、どう関わったらよいかを考える上で、一度全体像を押さえる検査を受けてみてはどうだろうか？」と話してみた。母親は「そういう話になるのかなと思っていた、」とある程度覚悟をしていたようだったので、話はトントン拍子に進み、児童精神科の受診となった。予約を入れ、母親が本児を連れて受診し、その結果をみて今後を検討していこうということになった。

2か月後、検査結果も出たところで面談となった。診断は「広汎性発達障害、ADHD」であり、投薬が開始された。学校では特別に配慮が必要な生徒として支援を入れ、学級で少しずつ落ち着いて生活できるようになった。

その後筆者はその学校のSCを終え別の学校に転勤になったため、本児とは中学まで出会わなかった。たまたま本児が進学した中学のSCだったことからそこで母親との面談が再開されることになったのである。

中学校に進学してからの本児は、中々学校に馴染めず、不登校傾向となり、学校に来て教室に入れないなど不応症症状が続いた。そのため、母親との面談を続けることになり、月1回程度面談していた。投薬と受診は続けていたので、問題行動としては不登校傾向のみで、時折本児面談も入っていた。

本児は、何時もニコニコしていて、勉強よりも友達と上手いかないということを訴えた。それをニコニコしながら話し、同学年に仲の良い子が一人もいないといった。むしろ年下の小学生と遊ぶことが多く、年齢にしたら幼い感じが続いていた。

そんな中母親から相変わらず部屋が散らかっていることへの不満が語られ、そのことで父親とも喧嘩になるとのことで、何かお手伝いできることはと考え、片付けを本児と筆者で行ってみようということになった。本来は母親と一緒に片付け

るべきだろうが、この母親は今までさんざん一緒に片付けてきてあつという間に元に戻ることにげんなりし、もう金輪際一緒に片付けることはしないと宣言してしまっていたのだ。そこで夏休みに何度かに分けて、家庭訪問し、本児の部屋掃除を筆者と一緒にすることになったのである。行ってみると本児の部屋はベッドの上以外は色々なものが床に山になっていて、そこには何かの切れ端や、お菓子の包み紙や、幼児が使うおもちゃのお金、ビーズ、絵具、紙、段ボール、その他幼少期からの物が入り混じって重なっていた。その山はベッドの下や勉強机の下、勉強机の引き出し、クローゼットの中にもつながっていた。本児に、「これじゃあベッドに行くのも大変じゃない。どうやってベッドに行くの？」と聞くと、ドアから1mくらいのところに物の隙間がありそこに立って「ここからベッドまで跳ぶの」と、跳んで見せた。「なるほど！」と二人で大笑い。

暑い中(クーラーもない)汗だくになりながら、まずはクローゼットの中の服以外の物を整理し、次に勉強机の上、下、中と片付けていった。ある程度片付いたところで部屋の真ん中の山にとりかかり、次いでベッドの下、部屋の隅と片付けていく。3度ほど通って、何とか整理ができた。何日もつかわからないが、母親が少しホッとしてくればそれでよい。母親は少し綺麗になった部屋を見て喜んではいたが一言「いつまでこの状態を保てるか……。あと、居間に置いているあなたの物を全部部屋に持って行ってね。」と。「お母さん、頑張ったのでしっかり褒めてあげましょう！」と伝えたところ、「頑張ったね」とはいつてくれた。

本児との面談で、将来の夢の話になったとき「タレントかモデルになりたい」と言っていた。本児は背も高く、母親似でスラっとして手足が長く、顔も日本的美人の部類だったので、夢のまた夢とはあながち言えないと思っていた。しかし母親は厳しく「それにはもう少し痩せないか」となどと言う。その一方でタレントやモデルのオーディションの申し込み写真を送ったりしていた。残

念ながら書類で落選が続いていた。

本児が2年になってしばらくした時、学校から本児が男性の車で登校し、下校時迎えに来ていたとの話が入り、騒ぎになった。相手は誰なのか、どうして一緒に来たのか、どこで知り合ったのかなどが聞き取られた。相手はネットで知り合った10歳年上の会社員で、一緒に死のうということで、風邪薬一瓶を買っていた。

母親も学校に呼ばれ、筆者も入ってネット環境の管理、薬の管理、病院と相談、カウンセリングの継続などが話し合われた。

学校では本児が得意な事を中心に何か手伝ってもらおうなど、自己評価を上げられるようなサポートを考え、実行してもらおうようにし、カウンセリングでも自分と向き合いながらも将来に向けて少しでも希望が持てるようにと関わって行った。その後は何事もなく、3年生になり、無事に修学旅行も行った。

父母ともに本児の自立のためにと高校受験は地元から離れたところで考え、無事合格して寮に入った。新しい環境で再出発となったし、発達の問題があることは当然高校に伝えられており、特別に配慮が必要な生徒として手厚くみて貰える筈だった。母親は高校入学で離れたことで安心したのか、仕事をはじめ、いずれ家を出たいと言っていたことのために行動し始めた。一方本児も何とかうまく高校に馴染めたように見えていた。ところが、1年を終える前に、自殺未遂を寮で起こし、退学（転学）することになってしまった。それまでに辛いことがあったと思われるのだが、本児からの表出はなく、普段通りの状態だったため、誰もそんなことをするとは思っていなかった。

高校で再出発と思っても、高校生にしたら幼い本児と周りの子とは中々話も合わなかったのだろう。退学の話がされたとき、母親の涙を初めてみた。母親も、妙に微笑をたたえ続けていたのは、本児と同様自分の感情を上手く出すことができなかつただけなのだろう。

その後本児は通信制高校に転校し、無事に卒業して服飾関係の専門学校に進学したそうである。

モデルかタレントになる夢は果せてはいないが、今は何とか日々を送っているようだ。

## まとめ

玲愛さんの場合は、自殺企図・自傷行為は薬を飲もうとした時と寮での自殺未遂の二回だけだったし、実際には毒物を飲もうとしたが飲めずにはきだしたというものだった。それでも学校は直ぐに退学としたのは残念な話である。特別に配慮が必要な子、ADHDを持っていて薬を飲んでい子である。高校生といっても薬を飲み忘れることもあつただろうし、衝動的に自殺を考えることだつてあるだろう。一回の事だけで退学を勧めるのはどうかとは思つた。やり直すチャンスを与えることが教育的指導なのではないだろうか？高校は校長の考え方ひとつだつたりするので残念な結果となつたが、その後何とか本児の成長がみられ、専門学校も無事卒業し、今は何とか働いている。人生きつといろいろなことにぶつかるとは思つたが、感情表出が無いというより、何時もニコニコと笑みを浮かべているのはそのままだろう。ニコニコした母子の姿がいつまでも記憶に残っている。困ると笑顔になってしまう、そんな人の存在を知つた最初のケースでもあつた。母親は結局いつもクリーム色のジャージかジャンパーを着ていた。クリーム色が好きだつたのだ。そして本児は相変わらず何かを作ることにはまつており、手も器用だつたので、結局服飾関係の仕事に就き、適材適所となつた。終わりよければすべてよしであるが、どんな子も、変化する時期があるなと思う。本児の場合は高校を転校した時である。部屋はきっと今も散らかつているのだけれど、それでも社会に適応的に過ごせているのは素晴らしい。

我々心理師・心理士はこうした人々の良いほうへのちょっとした変化の瞬間に携わることが一番の楽しみであり、その楽しみがまた次の人へと関わるエネルギーをくれる。